

## ドストエフスキーの物語詩『大審問官』とプレスコットの歴史書

### The Poem “The Grand Inquisitor” by F.M. Dostoevsky and the Book by Historian W. Prescott

木寺 律子

KIDERA Ritsuko

**要旨** : F.M. ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』で、イヴァン・カラマゾフが語る物語詩『大審問官』の草稿は大変有名で、カトリック、プロテスタント、ロシア正教、キリスト教全般など、実に多様な立場から解釈される。しかし、『大審問官』のプロトタイプとして知られ、ドストエフスキーが高く評価していた W. プレスコットの歴史書と比較すると、物語詩の時代や場所の設定は極めて曖昧なことが分かる。当時ロシア人もスペインを訪問するようになり、ステレオタイプではない実際のスペインの様子を伝えていた。その一方で、スペインについて不正確な知識を語るロシア人を描くコミカルなロシア文学作品も書かれている。『カラマゾフの兄弟』のイヴァンもスペインのことを良く知らず、このために『大審問官』は地理的歴史的制限を超越して、多様な解釈を可能にした。

**【キーワード】** F.M. ドストエフスキー、『カラマゾフの兄弟』、W. プレスコット、スペイン、異端審問

**Abstract** : Ivan Karamazov talks the plan of his poem “The Grand Inquisitor” in the works of “The Brothers Karamazov” written by F.M. Dostoevsky. We can understand it from the many different positions, for example, Catholic, Protestant, Russian Orthodox, and the whole Christianity. However, when we compare “The Grand Inquisitor” with the history book by W. Prescott, which Dostoevsky highly evaluated, we find that the place and the time of this story are uncertain. At the time of Dostoevsky Russians also had visited Spain and they had tried to tell Russians the true Spain. On the other hand, there was written some comical novels about Russians, who don't know well about Spain. Ivan from “The Brothers Karamazov” also doesn't know about Spain enough, so “The Grand Inquisitor” transcends history and geography, it gave us the possibility of many interpretations of “The Grand Inquisitor”.

**【Keywords】** F.M. Dostoevsky, “Brothers Karamazov”, W. Prescott, Spain, Inquisition

#### 1. 問題提起

##### 1-1 『カラマゾフの兄弟』中の物語詩『大審問官』

F.M. ドストエフスキー (Ф.М. Достоевский 1821-1881) の長編小説『カラマゾフの兄弟』(1879-1880) の第5編第5章は、「大審問官」という大変有名な章である。この章では、キリストが16世紀のスペインの町セビリヤに現れ、人々は彼につき従って喜ぶが、そこへ異端審問官<sup>1)</sup>が現れてキリストを捕えて牢獄に閉じ込めて

しまう。夜、異端審問官はキリストの元に一人で現れ、キリスト教における人間の自由を重んじる考え方によっては、愚かな民衆を統治するのは実際には不可能であると明かし、翌朝キリストを処刑するつもりだと語る。異端審問官の話聞き終えたキリストは、無言のまま異端審問官にキスをする。これを受けて異端審問官は、自身の先程の言葉に反して牢獄の扉を開け、キリストを夜の町に逃がす。

### 1-2 物語詩『大審問官』の多様な解釈

人間の集団統治の困難さや人間の自由の問題を扱い、思想的、宗教的、哲学的に深遠な問題提起を含むこの章は、半ば独立した作品として扱われていて、今までに非常に多くの先行研究がある。

例えば、物語詩『大審問官』の中の登場人物異端審問官の立場をローマ・カトリックの立場であるとし、カトリックやプロテスタントよりもロシア正教の思想がより神に忠実であるとする V. ローザノフ (В. Розанов 1856-1919) の研究<sup>2)</sup>は、この分野の研究における古典的名著である。他にも大審問官の立場をキリストに対する反キリストとして、無神論的社会主義と重ね合わせながら『大審問官』を論じ、ドストエフスキーの唱えるキリスト教は、保守的なロシア正教や保守的なカトリックを超えた新しいものとする N. ベルジャーエフ (Н. Бердяев 1874-1948) の研究<sup>3)</sup>、『大審問官』はカトリックとの戦いを表していると指摘するワルター・ニックの研究<sup>4)</sup>、『大審問官』の問題はカトリックにもロシア正教にもあるとする桶谷秀昭<sup>5)</sup>、プロテスタントの視点からドストエフスキーに関心を持ち、『大審問官』はカトリック教会の問題点を表現していると考え、ロシア正教には言及していない哲学者森有正 (1911-1976) の研究<sup>6)</sup>などがある。まさにさまざまな立場と視点から『大審問官』が研究されてきたことが分かる。

それにしても、『大審問官』というたった一つの作品について、ロシア正教、カトリック、プロテスタント、キリスト教全般といった多様な立場からの理解と解釈が、なぜ可能なのだろうか。本論では、物語詩『大審問官』がこれほど多様な解釈に応えられるわけを考察したい。

### 1-3 W. プレスコットの歴史書

ドストエフスキーの蔵書にはアメリカの歴史家ウィリアム・プレスコット (William Hickling Prescott 1796-1859) の著書『スペインの王フェリペ二世の治世の歴史』(«История царствования Филиппа Второго короля испанского»)<sup>7)</sup>のロシア語訳があったことが知られている<sup>8)</sup>。ドストエフスキーは「アメリカの歴史家 W.H. プレスコットの『メキシコの征服』、『ペルー征服』、『フェリペ二世の治世の歴史』—中略—を高く評価していて、青年層に W. プレスコットを読むように助言した<sup>9)</sup>。」レオニード・グロスマン (Л. П. Гроссман) は、『フェリペ二世の治世の歴史』が『カラマゾフの兄弟』の物語詩『大審問官』のプロトタイプの一つとなったことを指摘している<sup>10)</sup>。またアカデミー版ドストエフスキー全集の解説にも、「ドストエフスキーはスペインの異端審問

の活動について、とりわけ W. プレスコットの『スペイン王フェリペ二世の治世の歴史』(2巻本、英語からの翻訳、ペテルブルグ、1858年出版)を通じて知っていた<sup>11)</sup>。」(15, 557)と指摘されている。

ドストエフスキーの所蔵する本のうちにプレスコットのこの歴史書があったことや、この本が『大審問官』の創作に影響した可能性については、K.A. ステパニヤン (К.А. Степанян)<sup>12)</sup>、ジャック・ヴァイナー (Jack Weiner)<sup>13)</sup>、V.E. バクノ (В.Е. Багно)<sup>14)</sup>などが物語詩『大審問官』に関する論文で一言だけ言及している。とはいえ、このプレスコットの本の内容を基にして物語詩『大審問官』を考察する研究は今までにはほとんどなかった<sup>15)</sup>。本論では、プレスコットの本との比較で物語詩『大審問官』を考察し、プレスコットの歴史書と、物語詩『大審問官』の内容を照合する<sup>16)</sup>。論点を明確にするために、ドストエフスキーの『大審問官』に影響を与えていることがすでによく知られている、ヨハン・クリストフ・フリードリッヒ・フォン・シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller 1759-1805) の『ドン・カルロス』(1787)などの他の作品とも、プレスコットの歴史書を比較する。

## 2. プレスコットの歴史研究

### 2-1 プレスコットの歴史書の全体像

プレスコットの歴史書『スペイン王フェリペ二世の治世の歴史』には、どのような事柄が書かれているのであろうか。

『スペイン王フェリペ二世の治世の歴史』の叙述は、フェリペ二世の父カルルV世の時代から始まり、フェリペ二世の息子ドン・カルロスの死、フェリペ二世の3番目の妻でドン・カルロスの若い継母であったイザベラの死によって終わる。

プレスコットによると、カルルV世もフェリペ二世も熱心なカトリック教徒で、スペイン王国の統治のためにはカトリックが重要であると考えており、レコンキスタ以降のスペインでイスラム教とユダヤ教が民衆のうちに深く根付いていることを知っていて、厳しく異端を取り締まった。その後スペインにプロテスタンティズムが流入し始めると、民衆の中にスパイを送り込み、グラナダ、トレド、バルセロナ、セビリア、他の町々で異端審問がなされた<sup>17)</sup>。プレスコットは他にも、スペインとフランスとの国際関係、他の国々との戦争などを描いている (I, I, 46-180)。

フェリペ二世の異母姉のマルガレーテがネーデルランドの摂政をしていたときに、ネーデルランドにプロテス

タントが流入し (I, II, 74-88)、新しい動向はしばしば暴動化して聖像破壊運動が起こる (II, III, 38-68)。宗主国スペインのフェリペⅡ世はアルバ公をネーデルランドに派遣したが、このアルバ公は異端の取り締まりを非常に厳しく行った (II, III, 105-160)。アルバ公と同じようにフェリペⅡ世に仕えていたエグモントは、自分の故郷のネーデルランドの民衆に寛容だったため、アルバ公はエグモントが異端を見逃しているとして彼をとらえて処刑した。アルバ公のこのような行動の裏には、エグモントの武人としての高い能力に対する嫉妬もあったであろうという (II, III, 105-160)。

また、ネーデルランドで政治的な問題が起こっていた時に、フェリペⅡ世の身内でも問題があった。フェリペⅡ世の息子ドン・カルロスはフランスの王女イザベラと婚約していたが、この結婚は成立せず、フェリペⅡ世自身が彼女と結婚し、彼女を自分の3番目の妻にした。ドン・カルロスは病弱な人物で、階段から落ちた怪我がもとで長い間病気であった。ネーデルランドにプロテスタントイズムが広まった時、彼はこれに簡単に共感してしまった。

ネーデルランドの軍隊の最高司令官に指名されたアルバ公が、軍隊がスペインを離れる前に、王子の元に表敬訪問に来たとき、王子は怒って「あなたはフランドル地方 (ネーデルランド南部) には行くな。私自身が行く！」と叫んだ。アルバ公は彼を鎮めようとして、この任務は皇位後継者にとっては危険が多く、自分が反乱を鎮圧して王が国に入れる準備をするから、そのときに、もしカスティーリャに王子が居住することが不可欠でなければ、王子はネーデルランドへご両親を安全にお連れすることができると言った。アルバ公の言葉はカルロスをますますいら立たせた。王子は剣を手にとってアルバ公に飛び掛かり、「もしあなたが行くのなら、私はあなたを殺す！」と叫んだ。彼らの間には闘いが始まり、これは、侮辱を感じた王子がアルバ公の行為を裏切りとみなすこともありえたために、アルバ公にとって危険なことであった。幸いなことに、アルバ公は王子よりもずっと強かった。アルバ公は王子をつかまえ、王子が力尽きるまでしっかりと抱きかかえていた。しかし、カルロスは自分の身が自由になったと感じると、アルバ公に狂ったように飛び掛かり、アルバ公はまた同じ方法で自分を守った。騒音を聞きつけて隣の部屋から侍従の一人が駆け付けた。侍従が現れると、カルロスはアルバ公の手から逃れて、自分の部屋へと走り去った (II, IV, 127)。

その後ドン・カルロスはひそかにネーデルランドに脱出を試み、フェリペⅡ世はやむを得ず、自分の息子を軟禁した。ドン・カルロスの死後すぐに、イザベラも死去した。イザベラはドン・カルロスに対して理解を示していて、ドン・カルロスの死を悼んだという。以上が、プレスコットの歴史書の概要である。

## 2-2 スペイン史を把握した上での『大審問官』の理解

物語詩『大審問官』は、長編小説『カラマーズフの兄弟』の中で、主人公の一人のイヴァン・カラマーズフが弟アリョーシャだけに、個人的な場で語る話である。イヴァンはまだ物語詩を完成させていないので、彼が語るのには詩になっていない散文形式で、詩の草案である。イヴァンは「僕の作品の舞台は16世紀に起こる」、「僕の作品の舞台はスペインのセビリアだ」<sup>18)</sup> (14, 226) と繰り返し言っていて、実際、この物語詩は16世紀のスペインを舞台とし、スペインの異端審問を扱っている。

物語詩『大審問官』の研究に様々な立場がある一方で、これらの研究の多くはロシア正教やキリスト教全般における立場を重視しており、スペイン史やスペイン国内の事情を考慮した研究がなされるようになってきたのは最近のことである。スペインのイメージとして最初に異端審問を挙げて、スペインの異端審問の恐ろしさを大げさな形で理解するというのが、ヨーロッパやロシアに広まった偏見であることは、E.O.カルーギナ (E.O. Калугина) が指摘している。ロシアやヨーロッパに広まったスペインの異端審問の恐ろしいイメージは黒い伝説 (черная легенда) とも呼ばれている<sup>19)</sup>。物語詩『大審問官』の読者も、スペインは異端審問を行う恐ろしい国であるといった安易な読後感を得る場合がある。また逆に、そもそもドストエフスキーの思想にはナショナリスティックな要素があるため、物語詩『大審問官』にもカトリックの国家に対するドストエフスキーの偏見、もしくは意図的な批判が表現されていると解釈することも可能である。物語詩『大審問官』がスペインの異端審問を扱っているということは、スペイン文化に対してもより公平で客観的な視点でこの作品を検討しようとする場合に大変な困難を伴う。

それでも近年では、K.ステパニヤンは、ドストエフスキーの物語詩『大審問官』を考察するにあたって、スペインのセビリアを実際に訪問している<sup>20)</sup>。V.トゥニマーノフ (В. Туниманов) も、ドストエフスキーが描いた異端審問官は、スペインの異端審問官の史実にあまり合致しない創作であることに言及し<sup>21)</sup>、杉里直人<sup>22)</sup>も物語詩『大審問官』の考察においてスペインの異端審

問の歴史を具体的に確認した。本論でもこれらの動向を踏まえた上で、プレスコットの歴史書におけるスペイン史との関連で物語詩『大審問官』を考察する。この場合に、物語詩『大審問官』は作家ドストエフスキー自身の思想を直接表した作品であるというよりも、長編小説の登場人物であるイヴァン・カラマーゾフが創作したものであるという点が重要になってくる。

## 2-3 歴史研究の大家としてのプレスコット

一方でプレスコットの歴史書は、ドストエフスキー研究史上でこそ、これまで内容が検討されてこなかったものの、スペイン史の研究やアメリカにおける歴史研究の分野では、実は大変著名である。

ウィリアム・プレスコットの先祖はイギリスからアメリカに渡ってきた清教徒であった。彼の祖父も彼と同名のウィリアム・プレスコットというが、アメリカ独立戦争の際にバンカーヒルの戦いで活躍したことで知られている。歴史家のウィリアム・プレスコット自身は1796年生まれで、ハーバード大学で学んだ。彼は、新大陸と旧大陸の両方のスペイン語圏で綿密に資料収集を行った上で公平で客観的な視点から歴史を記述し、それまでの研究とは異なる新しい歴史研究の方法を確立した。

プレスコットの歴史書は出版当初からベストセラーとなり、様々な国で翻訳された<sup>23)</sup>。現在でもプレスコットの歴史書は、スペイン史を論じる際に参照されている。例えばヘンリー・ケイメンはスペインの隆盛と衰退を考察するにあたって、プレスコットの歴史書を引用しつつ、自説を展開している<sup>24)</sup>。プレスコットの歴史書は日本語にも翻訳されていて、例えば『ペルー征服<sup>25)</sup>』などが日本でも親しまれている。

確かにプレスコットの歴史書の内容は、スペインに題材をとったそれ以前のヨーロッパの著名な作品とは視点が異なる面がある。例えば、シラーの『ドン・カルロス<sup>26)</sup>』や『オランダ独立史』(1788)、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1749-1832)の『エゲモント』(1788-1789)などの作品は民族の独立運動の偉大な精神を礼賛し、オランダの立場からヨーロッパの歴史を描いている。『ドン・カルロス』において、ドン・カルロスは残酷な父王によって婚約者を奪われた悲劇の主人公である<sup>27)</sup>。しかし、プレスコットの歴史的叙述ではドン・カルロスは英雄ではなく病弱な人物で、ネーデルランドにおける独立運動に共感したのも充分な考えのないままのことであったとされている(II, IV, 164)。これは、現代のスペイン史研究でも支持される、より史実に近い視点である<sup>28)</sup>。ヨーロッパにおいて悪名高かったスペイン

の異端審問についても、プレスコットは、当時のスペイン王国の状況では、レコンキスタによってイスラム王朝から取り戻した土地にカトリックの国を維持するためにはやむを得ないものであったことを強調している<sup>29)</sup>。

W. プレスコットの本を所持し、この本を青年層に推薦していたドストエフスキーには、スペインの歴史を考えるにあたって、シラーの文学とは異なる視点があることを理解していたはずである。

## 3. 物語詩『大審問官』の舞台

### 3-1 物語詩『大審問官』の時代設定

プレスコットの歴史書と比較しながら物語詩『大審問官』を読むと、物語詩『大審問官』がどの時代を舞台にしているのか、明確でないことが分かる。

イヴァン・カラマーゾフは、自分の物語詩の舞台は16世紀のセビリアだと言っている。しかし、物語詩『大審問官』が扱うのは厳密に16世紀のどの時代のどのような人々に対する異端審問であるのか曖昧である。スペイン王国がレコンキスタの後に国内に深く根付いているイスラム教とユダヤ教を排除することが国の建設のためには不可欠であると考えていた時代の話なのか、その後スペインにもプロテスタントが流入し始め、セビリアなどの町でプロテスタントの取り締まりがなされた時期のことなのか、ネーデルランドにプロテスタントが流入し、彼らがカトリック教会での聖像破壊運動などの暴動を起こし、スペインの支配から逃れようとしていた時代に、ネーデルランドでプロテスタントに対してスペインが異端審問を行った時代の話なのかについて、イヴァンは一切言及していないのである<sup>30)</sup>。

アカデミー版ドストエフスキー全集の注には、最初の異端審問官(15, 557)であったトマス・デ・トルケマダ(Torquemada, 1420-1498)の名前が、物語詩『大審問官』のモデルとして挙げられている。しかし、トマス・デ・トルケマダが活躍したのはフェリペII世の治世よりも前の時代であり、彼は15世紀の人物である。スペインでは、アラゴン王フェルディナンドII世(1452-1516)(カスティーリャ王としてはフェルディナンドV世(1474-1504))が、その妻でカスティーリャ王イザベラI世がカトリック両王として共同統治を行い、イベリア半島にける最後のイスラム王朝グラナダ王国を1492年に滅亡させてレコンキスタを終了させた。この時代には、国内のイスラム教徒とユダヤ教徒に対する異端審問が行われ、トマス・デ・トルケマダは当時の人物である。もし彼が物語詩の異端審問官のモデルだったとすると、物語詩『大審問官』の舞台はフェリペII世より以前のフェ

ルディナンドⅡ世の時代であり、異教徒とはスペイン国内に残っていたイスラム教徒とユダヤ教徒のこととなる(14, 226)。しかし、S.キバーリニクが指摘しているように、トルケマダとイヴァンの物語詩の中の異端審問官の人物像の類似点は二人とも長寿であったことのみで、それ以外には何も共通するところがない<sup>31)</sup>。

### 3-2 物語詩『大審問官』の場所の設定

物語詩『大審問官』は時代だけでなく、セビリアという場所の設定も曖昧である。または意図的に場所が変更されている。

確かに、セビリアはスペインにおいて最初に異端審問がなされた町であり<sup>32)</sup>、アカデミー版ドストエフスキー全集にも「1480年にセビリアに初めて異端審問所が設置された」(15, 557)と記されている。プレスコットによると、セビリアでは、プロテスタントに対する異端審問もあったという。しかし、物語詩『大審問官』に強い影響を与えたことで有名なシラーの『ドン・カルロス』は、マドリードを舞台にしている。シラーと比較すると、ドストエフスキーは舞台をマドリードからセビリアに移したことになる<sup>33)</sup>。

物語詩『大審問官』にはセビリアの夜が「一日が過ぎる。暗く暑い『死せるような』セビリアの夜だ。空気は月桂樹とレモンの香りがする(14, 227)。」と描写されている。「空気は月桂樹とレモンの香りがする」というのはA.C.プーシキン(A.C.Пушкин 1799-1837)の詩『石の客』(1830)の一部分であるが、女主人公ラウラのマドリードの夜について語っていることを引用したものである。イヴァン・カラマーゾフはただ単に遠い国スペインについての知識を十分に習得していないだけでなく、ロシアの詩人プーシキンの作品もうろ覚えのようである。『石の客』と比較してもやはり、ドストエフスキーは舞台をマドリードからセビリアに移したことになる<sup>34)</sup>。プーシキンはスペインを舞台にした作品を多く書いたが、『夜のゼフィール』(1824)、『私はここだ、イネゼリヤ』(1830)、『優雅なスペイン女の前で…』(1830)、『男妾は馬に乗る』(1836)、『ロドリク』(18…)などは、セビリアを舞台にしている。これらはドン・ジュアン<sup>35)</sup>のイメージと関わる作品で、セビリアはドン・ジュアンの故郷である。これらの詩がイヴァン・カラマーゾフに影響していて、そのために彼は物語詩『大審問官』の舞台をセビリアにしたのかもしれない。プーシキンの詩の引用は物語詩『大審問官』に叙情的なニュアンスをそえている。もっとも、これは本題の異端審問とは無関係であろう。

また、もし物語詩『大審問官』がスペインで行われた異端審問を題材にしているのではなく、ネーデルランドでのプロテスタントに対する異端審問を扱っているのなら、歴史の舞台はネーデルランドの町ブリュッセルのはずである<sup>36)</sup>。

### 3-3 物語詩『大審問官』創作における文学的想像力

このように時代と場所が曖昧にされることで、異端審問の対象である迫害された人々が誰なのかも曖昧になってくる。物語詩『大審問官』では、迫害の対象がプロテスタントなのかイスラム教徒なのか、それともカトリック教徒ではあるが風紀を乱す行動をとった者なのか全く不明である。

プレスコットの歴史書が詳細な資料に基づくものであり、キリスト教徒にもイスラム教徒にも公平で客観的な立場から書かれたものであること、ドストエフスキーもプレスコットのこのような研究を高く評価していたことを考慮に入れた上で、物語詩『大審問官』の時代や地理の曖昧さを考えると、作家ドストエフスキー自身がスペインの事情を知らなかったのではなく、ドストエフスキーは意図的に物語詩『大審問官』を歴史的史実から遠い曖昧なものにしたと考えられる。ドストエフスキー自身ではなく、『カラマーゾフの兄弟』の長編小説の登場人物であるイヴァン・カラマーゾフがスペインについて不正確な知識を披露している、または、イヴァン・カラマーゾフは物語詩を完成させておらず、物語詩の草案のみを語っているために、まだ時代や場所の設定は明確になっていない段階であるとも考えられる。物語詩『大審問官』の曖昧さは、知的ではあるものの繊細で頼りない面のある作中作者イヴァンの人物造形の一環であろう。イヴァンは、スペインの歴史を十分に知らないロシアの人々を皮肉った人物造形であるともいえる。

イヴァン・カラマーゾフの創作した物語詩『大審問官』は文学的想像力によって成り立っている点で、史実に基づく歴史書を書いたプレスコットの方針とは対極にある。好意的にとらえるならば、時代や場所のはっきりしない物語詩『大審問官』では、多くの文学作品や様々な時代の史実を自由自在に引用して、より豊かな文学的イメージを担うことが可能になっている。あるいは逆に、イヴァン・カラマーゾフの物語詩は、様々な宗教的立場からの解釈が可能である点で、シラーの『ドン・カルロス』や『オランダ独立史』とは異なり、プレスコットの歴史記述の客観的な視点に沿っているというべきかもしれない。

## 3-4 19世紀ロシアにおけるスペイン文化の受容

ロシアにおけるスペイン文化受容の歴史を研究した M.P. アレクセーエフ (M.П. Алексеев) によると、18世紀後半までロシアはスペインについての知識を主にフランスを通じて、ごくたまにはドイツやイギリスを通じて得ていた。ロシアでは当時すでにスペイン文学のフランス語訳が広まり、スペインをモチーフにしたフランス文学も知られていた<sup>37)</sup>。ドストエフスキー文学やロシア文学におけるスペインのよくあるイメージは、異端審問のほかでは、ドン・キホーテ<sup>38)</sup>とドン・ジュアンである<sup>39)</sup>。

作家ドストエフスキー自身はヨーロッパ旅行の際にスペインを訪問していない。しかし、1840年代にはすでにロシア人もスペインを訪問するようになり、スペイン旅行記を出版していた。ドストエフスキーが『カラマゾフの兄弟』を執筆した時には、すでにスペインを訪問したことがあるロシア人がたくさんいて、彼らは今までのスペインのステレオタイプなイメージとは異なる実際のスペインの様子をロシア人に伝えようとしていた<sup>40)</sup>。作曲家の M.I. グリンカ (M.И. Глинка 1804-1857) や旅行家の V.P. ボトキン (В. П. Боткин) などがその中でも有名である<sup>41)</sup>。グリンカは、スペイン滞在の経験を活かしてスペインをテーマにした『アラゴンのホタ』、『マドリッドの夜』、『カステイーリャの思い出』などを作曲した<sup>42)</sup>。

E.O. カルーギナによると、ドストエフスキーの物語詩『大審問官』以前にもさまざまなロシア文学作品がスペインの異端審問を扱っている<sup>43)</sup>。

例えば、ドストエフスキーの友人の A. マイコフ (А. Майков) も『女王の懺悔：スペイン異端審問の伝説』(«Исповедь королевы (Легенда об испанской инквизиции)») という詩を書いている<sup>44)</sup>。ここで A. マイコフは、フェルディナンドV世とその妻イザベラI世を描いた。マイコフの視点は異端審問に批判的であるが、この作品では少なくとも史実と時代は明確にされている。マイコフのこの作品が、ドストエフスキーの物語詩『大審問官』のプロトタイプのひとつになっている可能性を望月哲男が指摘しているが、それならば、ドストエフスキーもスペインの異端審問を題材にとった作品を創作するにあたって、本来なら時代を正確にすべきであることを知っていたであろう<sup>45)</sup>。

実は、ロシア文学において、スペインについてのいい加減な知識を語るロシア人の登場人物の描写がなされるのは、『カラマゾフの兄弟』だけではない。

ドストエフスキーが『カラマゾフの兄弟』より以前

に執筆した喜劇的な中編小説『おじさんの夢』(1859)では、スペインの形象が重要である。女主人公ジーナの母親マリヤ・アレクサンドロヴナは、娘や老公爵に盛んにスペインへ行くことを薦めていて、アルハンブラ宮殿、グヴァダルキビール川、マラーガ、温暖な気候とレモンの樹などといったステレオタイプなスペインのイメージを列挙しては、彼らの気持ちを惹きつけようとしている。しかし、彼女は、マラーガが島であると話しているが、実際にはマラーガはスペイン南部の町であり、彼女はおそらくマヨルカ島とマラーガを混同しているのであろうと、アカデミー版ドストエフスキー全集の注に指摘されている。(2, 517)

ニコライ・ゴゴリ(1809-1852)の『狂人日記』(1830-1831)では、主人公のポプリシチンがスペインについての不正確な知識を披露している。女性に王位継承権がなかったスペインでフェルナンド7世が弟ドン・カルロスに王位を譲らず、幼い娘に王位を譲ることにしたというニュースを知った彼は、自分がスペインの王位を継ぐべき真の人物だと考えるようになって、精神病院へ運ばれる。ポプリシチンは精神病院の院長を異端審問官だと考えている。さらに彼は19世紀のフェルナンドVII世の弟ドン・カルロスと、シラーの作品『ドン・カルロス』によって有名になった16世紀のフェリペII世の息子ドン・カルロスを、名前が同じだという理由から混同している<sup>46)</sup>。

スペインについての不正確な知識を話す登場人物の描写は、スペイン自体に対する批判というよりも、ロシア人がスペインを実際に訪問するようになり、スペインについてのより正確な知識を得るようになり始めた時代のロシアの雰囲気、コミカルに表現したものだといえる。

## 4. 結論

『狂人日記』や『おじさんの夢』の登場人物たちと同様に、『カラマゾフの兄弟』のイヴァン・カラマゾフはスペインについての十分な知識がなく、創作中の物語詩『大審問官』にはイヴァンの知識の不足が表れている。一見知的な人物に見えるイヴァンの人物造形は、帝政ロシアの無神論的知識人に対する批判が込められているとも考えられる。物語詩『大審問官』の理解と先行研究に、カトリック、プロテスタント、ロシア正教、キリスト教全般など多様な立場からの解釈があり得るのも、異端審問の舞台の場や時代、どの異教徒に対する異端審問かなどが、あえて不明瞭にしてあるからである。

しかし、イヴァン・カラマゾフはスペインについての知識を十分に持っていなかったものの、セビリアに現

れたキリストの様子や、彼と話す異端審問官の様子を生き生きと描写した。イヴァンの創作した異端審問官は、人間の本质の愚かさや悪の問題を鋭く指摘し、真剣な問題提起をしている。このような問題提起は、作品の時代や場所の設定が曖昧であるためにかえって一般性を獲得した。イヴァンが不正確な知識によって歴史や地理を混同したという喜劇的状况の中でキリストがセベリアを選んで登場することで、スペインのセベリアはかえって時代的、地理的制限を超越した町としてより複雑な問題を提起できる場となり、物語詩『大審問官』は思想上の制限も超越したのである。作家ドストエフスキーはイヴァンの文学的想像力を口実にしてイヴァンに曖昧な物語詩を創作させたが、この結果、図らずしてか意図的であるのか、自分自身の愛国的ナショナリズムの政治的立場を超えるような文学上の問題提起を行うことになったのではないか。

本研究は日露青年交流センターの日本人研究者派遣制度の助成により実現した。この場を借りてお礼申し上げたい。

#### 注

- 1) 日本のドストエフスキー研究や『カラマーゾフの兄弟』の翻訳において、この人物は「大審問官」と呼びならわされている。しかし、歴史的背景を考慮すると、この人物はつまり、異端審問官、または宗教裁判所長官であることが分かる。本論では、物語詩の題名はすでに呼びならわされているように『大審問官』とするが、この後の論の展開上、この登場人物の職務が異端審問官であることを明確にしておく必要があるので、登場人物については「異端審問官」という訳語を使用する。
- 2) *Розанов, В.В.* Легенда о великом инквизиторе Ф.М. Достоевского, опыт крыт. коммент. 1924.
- 3) *Бердяев, Николай* Мирозозерцание Достоевского// Философия, творчества, культуры и искусства, кн.2.
- 4) ニック、ワルター（信太正三、工藤喜作訳）『ドストエフスキー：宗教的思想家』理想社、1964。
- 5) 桶谷秀昭『ドストエフスキイ』河出書房新社、1978。
- 6) 森有正『ドストエフスキー覚書』筑摩書房、1967年。
- 7) *Прескотт У.Х.* История царствования Филиппа Второго короля испанского в двух частях. Пер. с англ. СПб, 1868. ドストエフスキーが実際に読んだ可能性があるプレスコットの歴史書のロシア語訳は、1858年版と1868年版の2種類の版がある。本論では、1868年版から引用している。英語からロシア語に翻訳した訳者の名前は記載されていない。プレスコットの英語原文は、*The Works of William H. Prescott: History of The Reign of Philip The Second, King Of Spain. London, 1855.* を参照した。
- 8) Библиотека Ф.М. Достоевского. Опыт реконструкции. Научное описание. СПб., 2005, С. 142. ここでは、ドストエフスキーが所持していたプレスコットの本は1858年版と1868年版のうちのどちらか不明であるとしてある。もっとも、どちらの版でも全体のページ数は同じである。
- 9) Библиотека Ф.М. Достоевского. Опыт реконструкции. Научное описание. СПб., 2005, С. 142. 尚、『メキシコの征服』は *Прескотт, Вильям* Завоевание Мексики: Фердинандом Кортесем. Издание В.Н. Маракуева, Москва, 1887、『ペルー征服』は *Прескотт, Вильям* Завоевание Перу. СПб. 1886. が、いずれもドストエフスキーの時代の版ではないものの、確認できた。英語原文は、*William H. Prescott, History of the Conquest of Peru. Dover Publication, New York, 2005*, 及び、*William H. Prescott. The History of the Conquest of Mexico.* <http://xroads.virginia.edu/~HYPER/PRESCOTT/toc.html> (2013年9月25日閲覧) で確認できた。
- 10) *Гроссман Л.П.* Достоевский художник // Творчество Достоевского, М., 1959. С. 35. Ср.: 15, 464, 557.
- 11) アカデミー版のドストエフスキー全集では、ドストエフスキーが所持していたプレスコットの本のロシア語訳の出版年は1858年とされている。
- 12) *Степанян, К.А.* Севильский кафедральный собор и поэма «Великий инквизитор» С. 113. // Достоевский и мировая культура, №. 24, 2008, С. 109-116.
- 13) *Jack Weiner, From Earthly Paradise to Hell on Earth: Spain in the Works of Dostoevsky.* Albatros Hispanofila, 1989, p. 58-59.
- 14) *Багно, В.Е.* К источникам поэмы «Великий инквизитор» С. 107. // Достоевский: материалы исследования №. 6, Л., Наука, 1985, С. 107-119.
- 15) *Белов, С.В.* Ф.М. Достоевский: указатель произведений Ф.М. Достоевского и литературы о нем на русском языке, 1844-2004 гг. СПб, 2011. 及び、*Щенников, Г.К., Тихомиров, Б.Н.* Достоевский: сочинения, письма, документы: словарь-справочник СПб, 2008. で、ロシア語によるドストエフスキー研究の参考文献を確認

- したが、プレスコットの名を論文のタイトルに含めている論文は確認できなかった。
- 16) このような問題設定は、S.A. キバーリニクの助言によって実現した。
- 17) *Прескотт, У.Х.* История царствования Филиппа Второго короля испанского в двух частях. Пер. с англ. Часть первая. Кн. II. СПб., 1868. С. 42-44. プレスコットの歴史書からの引用は、今後、本文中に記載する。ローマ数字は章と編、アラブ数字は頁を示している。スペインにはプロテスタントが少なかったが、1558年にセビリアなどで多少のプロテスタントのグループは見つかったことは、現代のスペイン史の文献にも指摘されている。J.H. エリオット (藤田一成訳) 『スペイン帝国の興亡：1469-1716』岩波書店、2009年、235頁。
- 18) *Достоевский, Ф.М.* Полн. собр. соч. в 30-ти т. 1982. Т. 14. С. 224. Ссылки на произведения и письма Достоевского даются в тексте по изданию: Достоевский Ф.М. Полн. собр. соч. : в 30 т. Л., 1972-1990. ドストエフスキーの作品や手紙の引用はすべてこのアカデミー版のドストエフスキー全集による。引用後の数字は、この全集の巻と頁を示している
- 19) *Калугина, Е.О.* «Черная легенда» об Испании в русской культуре // Пограничные культуры между востоком и западом (Россия и Испания) СПб. 2001. С. 252-297. スペインの「黒い伝説」の是非については、ヘンリー・ケイメン (立石博高訳) 『スペインの黄金時代』、岩波書店、2009年、99頁でも検証されている。また、D.W. ロートマックス (林邦夫訳) 『レコンキスタ：中世スペインの国土回復運動』、刀水書房、1996年、10頁でも、「黒い伝説」に言及されている。
- 20) *Степанян, К.А.* Севильский кафедральный собор и поэма «Великий инквизитор» С. 113. // Достоевский и мировая культура. №. 24, 2008, С. 109-116.
- 21) *Туниманов, В.А.* О литературном и историческом «прототипах» Великого Инквизитора // Лабиринт сцеплений. СПб, 2013, С. 61-71.
- 22) 杉里直人「イワンのばか」『ドストエフスキー広場』21号、2012年、4-23頁。
- 23) Harvey Gardiner *William Hickling Prescott : A biography*, University of Texas Press, Austin, 1969. 及び、Harry Thurston Peck *William Hickling Prescott*, Originally Published 1926, Published by Forgotten Books 2012. を参照。
- 24) ヘンリー・ケイメン (立石博高訳) 『スペインの黄金時代』、岩波書店、62頁。
- 25) W.H. プレスコット (石田外茂、真木昌夫訳) 『ペルー征服 (上、下)』講談社学術文庫、1980年。
- 26) 物語詩『大審問官』とシラーの『ドン・カルロス』の比較は、すでにチジェフスキーやキバーリニックによって研究されている。*Чижевский, Д.И.* Шиллер и «Братья Карамазовы» // Достоевский. Исследования и материалы. СПб., 2010. Т. 19. С. 41-42. *Чижевский, Д.* Шиллер в России // Новый журнал. Нью-Йорк, 1956. Т. 45. С. 109-135. *Вильмонт, Н.* Достоевский и Шиллер. Заметки русского германиста. М., 1984. С. 216-217. *Кибальник, С.А.* Диалектика свободы и счастья в «Легенде о Великом инквизиторе» («Братья Карамазовы» Достоевского и «Дон Карлос» Шиллера) // Cuadernos de Rusística Española. № 9. Granada. 2013. 井桁貞義も物語詩『大審問官』のプロトタイプにシラーの『ドン・カルロス』があることを指摘している。井桁貞義『ドストエフスキー：言葉の生命』群像社、2003年、174-205頁。
- 27) このような内容のシラーの『ドン・カルロス』が、物語詩『大審問官』の創作に影響を与えていることはすでによく知られているが、ドストエフスキーは単にシラーの文学を愛好していただけの立場にいたわけではない。シラーの『ドン・カルロス』は、作家フョードル・ドストエフスキーの兄ミハイル・ドストエフスキーがドイツ語からロシア語に翻訳し、フョードル・ドストエフスキー自身もこの翻訳の刊行に尽力した。*Данилевский, Р.Ю.* Фридрих Шиллер и Россия. СПб. 2013. С. 349-353. 参照。
- 28) ドン・カルロスが癪癪持ちの凶暴な人物であったこと、フェリペⅡ世は息子のドン・カルロスを捕えたためにヨーロッパでは残酷な父王のイメージが広まり、フェリペⅡ世が、息子のドン・カルロスを毒殺したという噂まで広まったが、実際には息子の行状が悪かったためにフェリペⅡ世はやむを得ない措置を取っただけであったことは、現代のスペイン史の文献にも指摘されている。J.H. エリオット (藤田一成訳) 『スペイン帝国の興亡：1469-1716』岩波書店、2009年、282-283頁。
- 29) スペインにおける異端審問はイスラム教徒に対してだけでなく、ユダヤ教徒に対しても行われ、多くのユダヤ教徒は形式的にカトリックに改宗したり、オランダに亡命したりした。マラーノやコンヴェルソと呼ばれた彼らについては、例えば小岸昭『スペイ

- ンを追われたユダヤ人：マラーノの足跡を訪ねて』ちくま学芸文庫、1996年に詳しい。異端審問とユダヤ人問題の視点から物語詩『大審問官』を考察した論文には、木寺律子「劇詩『大審問官』と共同体の問題」『むうざ』26号、2009年などがある。しかし、プレスコットの歴史書では、ユダヤ人問題にはほとんど触れられていない。そもそも、プレスコットの歴史書は皇帝や政治家の動向やヨーロッパの国際関係を中心にして歴史を叙述したもので、民衆の生活には言及がない。このため本論ではスペイン史を考えるにあたって、ユダヤ人問題には触れていない。
- 30) K.A. ステパニヤンは「プレスコットの本はドストエフスキーが取り上げたスペインの異端審問よりも少し後の時代を扱っている。フェリペⅡ世は『大審問官』に描かれているのより少し後の時代—1556～1598年—にスペインを統治していた。」と指摘している。これは、ドストエフスキーの「大審問官」に描かれているのは、フェルディナンドⅡ世(1452-1516)とその妻のイザベルⅠ世のカトリック両王の時代のイスラム教徒とユダヤ教徒に対する異端審問であったということを前提としているのであろう。*Степанян, К.А. Севильский кафедральный собор и поэма «Великий инквизитор» С. 113. // Достоевский и мировая культура. №. 24, 2008, С. 109-116.*
- 31) *Кибальник, С.А. О философском подтексте формулы «Если бога нет...» в творчестве Достоевского С. 160-161 // Русская литература. 2012. №. 3. С153-163.*
- 32) アンтониオ・ドミンゲス・オルティス(立石博高訳)『スペイン三千年の歴史』昭和堂、2006年。*Perez, Joseph (translated by Janet Lloyd) The Spanish Inquisition : a History London. Profile Books. 2004.*
- 33) ドストエフスキー全集の注には、物語詩『大審問官』の舞台をバルセロナとする草案が紹介されている。「1876年の『作家の日記』の準備資料を収めるドストエフスキーのノートには、『カラマゾフの兄弟』に直接つながっていくメモも見られる。例えば「異端審問官とパーヴェル。異端審問官とキリスト。バルセロナで悪魔を捕まえた。」というものである。」(15. 407).
- 34) スペインが地方色豊かな国で、北方の首都マドリドと、イスラムの文化遺産が多く残る南部の町セビリアは、雰囲気も異なることを考えると、作品の舞台となる町を変更することの違いは大きい。スペインのそれぞれの町の雰囲気や風俗、生活習慣については、V.P. ボトキン(В. П. Боткин)が当時すでにロシアで紹介していた。В. П. Боткинの«Письма об Испании»は [http://az.lib.ru/b/botkin\\_w\\_p/text\\_0040.shtml](http://az.lib.ru/b/botkin_w_p/text_0040.shtml) で確認した。(2013年11月12日閲覧。)
- 35) プーシキンはジョージ・ゴードン・バイロン(1788-1824)の『ドン・ジュアン』(1819-1824)などから影響を受けていることが知られている。
- 36) ゲーテの『エグモント』はネーデルランドの独立運動を描いているが、明らかにブリュッセルを舞台としている。
- 37) *Алексеев, М.П. Этюды из Истории Испано-русских литературных отношений // Отв. ред. А.М. Деборин, Культура Испании, Академии наук союза. 1940. С. 351-425.*
- 38) *Багно, В.Е. Дон Кихот в России и русское донкихотство СПб, 2009. Карен Степанян Достоевский и Сервантес : диалог в большом времени. Москва, 2013. 参照。*
- 39) ドストエフスキー文学全体におけるスペインのテーマや、ドン・キホーテとドストエフスキー文学の思想的関連については、ジャック・ヴァイナーが指摘している。*Weiner, Jack From Earthly Paradise to Hell on Earth: Spain in the Works of Dostoevsky. Albatros Hispanofila, 1989.*
- 40) ロシアにおけるスペイン文化の受容とは反対の、スペインにおけるロシア文化やドストエフスキー文学の受容については、以下の文献を参照できる。*Jordi Morillas Dostoevsky in Spain: A Short History of Translation and Research // Dostoevsky Studies Vol. XVII, 2013, 121-143.*
- 41) *Русские в Испании. Книга первая. Век XVII – век XIX. Сост. В.Е. Багно. М.: Центр книги Рудомино. 2012. С. 10-11.*
- 42) ワシナ・グロスマン(広瀬信雄訳)『グリンカ：その作品と生涯』新読書社、1998年、125-137頁。
- 43) *Калугина, Е.О. «Черная легенда» об Испании в русской культуре // Пограничные культуры между востоком и западом (Россия и Испания) СПб. 2001. С. 252-297.*
- 44) *Майков, А.Н. Palazzo // Избранные произведения. М., 1977. С. 105.*
- 45) 望月哲男「『大審問官』とA.H. マイコフの『スペイン異端審問の伝説』」、『東京大学文学部露文研究室年報』3、1983年、21-26頁。
- 46) この指摘はS.A. キバーリニク氏からご教示いただいた。
- (受付日2014年7月16日 受理日2014年10月22日)